

盲人たちと沈黙の声

——ダニエル・ジャンストー演出『盲人たち』、
古川日出男主催イベント「見えない波」——

宮脇永吏

長らく博士論文を執筆する生活をしていると、劇場で観る演目も自分の目下取り組んでいるテーマに近いものに絞られてくる。視野が狭くなっているとも言えるが、関心が重なるものに連続して出逢い、パズルのピースがぴたりと嵌まると突き抜けるような喜びがある。サミュエル・ベケット作品と「視覚」の問題について考えている現在、以下の演出およびイベントには、深い感銘を受けた。

まず一つ目は、2月初旬のこと。19区にある104 (CENTQUATRE) で上演されたメーテルランクの『盲人たち』を観た。演出は、ダニエル・ジャンストーである。日本でも近年、静岡舞台芸術劇場で上演されたサラ・ケイン『プラスチック』(2009)、テネシー・ウィリアムズ『ガラスの動物園』(2011)の演出によって存在が定着してきた演出家であるが、もとよりクロード・レジラの舞台美術を手掛けてきた実力派として、テキストの深い理解から編み出される舞台美術に定評がある。

salleに入る前はかなり待たされたので、何かしてくれるのかという期待はあった。通されると、室内は真白な煙が充満していて、足元も座るべき椅子も何も見えない。そこでなるほど観客も「盲人たち」の仲間入りをして、座るべき場所を求めて歩いていくのだが、辿りついた椅子も中央付近にばらばらと置かれ、向い合せだったり背中合わせになったりしている。さながら森に迷い込み、どこかわからぬ場所に座り込むという状況を初めから観客も共有するのである。「舞台」はなく、俳優たちは観客たちと同じ椅子に、ぼつりぼつりと座っている。それによって「わたしたち、いまどこにいるの？」という声が、まさに観客を含めた「わたしたち」のなかから発されるという

仕組みになっている。客席／舞台という二項対立が失われた盲目の共同体において、頼りになるのはまず耳である。筆者にとって一番心に響いたのは、ラストの場面での一言であった。老女の声が言う。「Écoutez les feuilles mortes.」耳を澄ませて、落ち葉の語る沈黙の声を聴くこと。盲人は人間の声だけでなく、言葉を持たない何かを聴くという別様な知覚を獲得している。見えないということは、理知的なものを超えたところにあるものを理解するひとつの可能性なのである。

この公演を観た後にもう一つ、まったく別の観点から同じことを再確認する機会があった。3月5日、7日に催されたイベント「見えない波」に通訳者として参加した時のことである。東日本大震災3周年を迎えた被災地の現状を伝えるため、3人の詩人および作家がヨーロッパ朗読遠征に来ていた。なかでも気鋭の作家、古川日出男の次の言葉が印象的に残った。「見えないものを見ようとする時に必要なのは、目ではない。」それは、「声」であり、「想像力」である、と。震災3年後の現在もなお、依然として苦しい状況のただ中にある人々がいる。しかし、後戻りすることのない時間のなかで、現地から遠く離れて日常を暮らす者たちには、彼らの姿やその心のなかが、見えない。そこで想像力を働かせる必要があるのだが、演劇も含めた文学の力というのは、このような場合に発揮されるのだと言う。

古川日出男は演劇的な身体感覚を持つ作家であった。いま、まさにこの場で、言葉を発し、空気を震わせることによって、メッセージを身体的に理解させようとする。彼が朗読した作品は戯曲ではなく、小説『ベルカ、吠えないのか?』(2008)、『馬たちよ、それでも光は無垢で』(2011)であったが、散文体の語りが劇的な生を持ちうる瞬間を目の当たりにした。文字に「響き」を与える、とでも言おうか。二次元の平面的かつ虚構の世界を、わたしたちの身体が生きている奥行きを持ったこの世界のなかで響かせる術を知っているのだと思う。例えばこんな具合である。7日は、『馬たちよ』の抜粋を通訳者2人と古川の3人でいわば輪唱するという形式をとった。古川が日本語で読み上げる福島的情景のなかに、最初の一文から抽出した一節「Rupture du jugement」を通訳2人がフ

ランス語でリフレインさせていく。あるいは、一つの文章 « L'océan pacifique était calme. » を3人が繰り返して読む。ある言葉の響きがかくつきりと残るまで響かせる。すると、聴いた者の頭のなかには色のついた情景が浮かんでくる。見たこともない世界が、声を通して脳裏に焼き付けられていく。それはわたしたちが生来持っている想像力の介在によるもので、時にそれは、現実には肉眼で見たものよりも強烈なイメージとなって留まることにな

る。視覚を剥奪された状況においては、声によって呼び起こされる無数のイメージの断片が、見るべき世界を、それぞれに固有の真実をつくり出すのである。

言葉を持たない落ち葉たち、言語を絶する経験をした被災者たちの声は、想像の眼をもって見ることによって初めて聴こえてくる。サミュエル・ベケットの晩年の散文作品で問題となるのも、このような視覚ならざる視覚なのだと感じている。